

歴史民俗資料学研究所 開設10周年記念講座  
この“クニ”のかたちを考える

日程：10月15日～11月26日（毎週水曜日）18:30～20:00  
会場：横浜キャンパス16号館視聴覚ホールB  
受講料：全7回 8,000円 定員：140名

- ①「日本人にとってクニとは何か」  
日程 10月15日  
講師 川田 順造（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
専門分野 文化人類学
- ②「クニとムラのはざままで 近世村人の実像」  
日程 10月22日  
講師 田上 繁（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
専門分野 日本近世経済史
- ③「在来農具の分布から地方色の成因をさぐる」  
日程 10月29日  
講師 河野 通明（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）  
専門分野 日本経済史
- ④「『扱いにくい資料』からクニを考える」  
日程 11月5日  
講師 橋川 俊忠（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
専門分野 日本政治思想史
- ⑤「『靖国』問題を考える」  
日程 11月12日  
講師 中島 三千男（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
専門分野 日本近現代思想史
- ⑥「天皇と伝統社会」  
日程 11月19日  
講師 山本 幸司（神奈川大学非常勤講師・静岡文化芸術大学教授）  
専門分野 日本中世史・思想史
- ⑦「戦後日本 日・米・東南アジアトライアングル」  
日程 11月26日  
講師 中村 政則（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
専門分野 日本近現代史

歴史民俗資料学研究所 開設10周年記念公開シンポジウム

歴史と民俗の交錯

記録すること・記憶すること

日程：12月7日（日）13:00～16:30  
会場：横浜キャンパス2号館 B1ホール  
パネラー：川田 順造（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
中村 政則（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
福田 アジオ（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）  
参加費：入場無料

第7回 常民文化研究講座

水がつなぐ人と社会

地域からの問いかけ

日程：11月15日（土）10:00～16:00  
会場：横浜キャンパス2号館 B1ホール  
講師：小坂 育子（水と文化研究会事務局長）  
畠山 重篤（牡蠣の森を慕う会代表）  
西内 燦夫（四万十川流域住民ネットワーク代表）  
川田 順造（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）  
参加費：入場無料 定員：250名

第2回 常民研企画展

「ぬいもの・つくりもの」

暮らしのなかの知恵と技

日程：10月21日（火）～12月22日（月）  
会場：横浜キャンパス3号館1階 常民参考室  
開室日：月～金 12:30～16:30  
木曜日のみ 15:30～19:30  
休室日：土・日・祝日  
11月2日（日）・15日（土）・16日（日）は開室  
入場：無料

人文学研究所 国際シンポジウム

「アジアのポップカルチャーと日本」

～アジア諸国のポップカルチャーは、  
現在どのように進化しているだろうか～

日程：11月2日（日）13:00～17:00  
会場：横浜キャンパス23号館 201講堂  
報告者：王向華（香港大学・日本研究センター）  
程郁（上海師範大学）  
オスカー・カンボマーネス  
（フィリピン・サントトマス大学）  
陳昌洙（韓国・世宗研究所日本研究センター）

神大フェスタ・中国語学科 講演会

「中国黄土高原 砂漠化する大地と人びと」

日程：11月5日（水）14:40～16:30  
会場：横浜キャンパス20号館310号室  
講師：高見 邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究 No.1

発行日 第1号 2003年10月31日発行  
編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム拠点推進会議  
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659

# 非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter

2003.10  
No.1

CONTENTS

## 表紙写真説明

非文字資料であるこの一枚の写真（インド、ニューデリー郊外の土器作りの一郭で、1997年8月、川田順造撮影）は、身体技法や技術、道具のあり方などについて、沢山のことを考えさせてくれる。

まず、この土器作りの人が、男性であること。人類社会では長い間、多くの作業の領域で、男女の分業が行われてきた。土器作りについても、たとえば私が長く暮らした西アフリカ内陸部の多くの社会では、土器を作るのは女性の仕事でその夫は鍛冶師、生まれた子どもは、男の子なら幼いときから父や兄の仕事を見習って鍛冶師になって土器作りの女性と結婚し、女の子なら母や姉の手伝いをしながら土器作りになり、鍛冶師の男と結婚する。インドの土器作りを多年研究してきた私の友人によると、インドでは男女とも土器製作にたずさわることが、轆轤（ろくろ）を使うのは、ごく一部を除いて男性に限られるという。

次に、この人の作業姿勢。インドでは、日本や中国南部、東南アジア、アラブ世界などと同様、人々は作業をするのにも、休息するのにも、しゃがむのが好きで、それが楽で安定した姿勢なのだ。ところが現代の欧米人には、しゃがめない人が多い。欧米では職人の作業も、伝統的に大部分立つか、高い位置で腰掛けてする。野球の捕手の捕球姿勢のように、かかとを上げたしゃがみは、欧米人にもできる。この写真の人がしているような深い安定したしゃがみは、足の甲と向こう脛のあいだの距離（きょたい）関節が、鋭角に曲がらなければならない。それは幼時からの習慣の問題だ。他の多くの地域では、しゃがみが行われているところでも、轆轤による土器成形の作業は台に腰掛けてする。インドでは蹴轆轤は発達せず、この人も台があるのに腰掛けず、台の上にしゃがんで作業している。

第三に、回転原理を応用した土器成形の轆轤。車など回転原理を応用した道具は、西アジア、東部地中海沿岸世界をはじめとして、ユーラシア大陸の大部分にみられるが、サハラ砂漠以南のアフリカや、白人との接触以前の南北アメリカ先住民社会にはなかった。日本でも、轆轤が大陸から渡来する前の縄文、弥生などの土器は、手びねりや巻き上げだけで成形されていた。

第四に、轆轤を使って土器の成形をする社会では、手回しのものであるが、多くは高い位置の腰掛け姿勢で、下のはずみ車を足で蹴って回転を与える。蹴轆轤の発達しなかったインドでは、しゃがんだ姿勢で足は使わず、両手で長い棒を持って轆轤に回転のはずみを与える。轆轤が十分に回ると、棒を脇に置いて両手で土器を成形するのだ。そしてこの回転の向きは、反時計回りなのである。日本では、土器成形の轆轤はふつう時計回りにまわす。ところが轆轤を日本に伝えた朝鮮半島や中国では反時計回りで、琉球でもそうだ。ユーラシア大陸は、中部のトルコからヨーロッパの西端のスペインまで、みな反時計回り。日本だけが、反時計回りに使われていた轆轤を大陸から取り入れて、回転の向きを逆にして使うようになったのだ。だが、なぜ？ 鋸や鉋（かんな）も、大陸では押して使うのに、それを取り入れた日本では引いて使った。なぜ？

こうした疑問には、さまざまな答えが考えられる。だが、それについて述べるには、沢山の関連する社会慣行や自然条件などについて、まず検討しなければならない。意外な広がりをもつそうした問題を探索してゆくのも、私たちCOEプログラムの重要な課題の一つだ。

（川田順造）

\*Marie-Claude MAHIAS, *Le barattage du monde: Essais d'anthropologie des techniques en Inde*, Editions de la Maison des Sciences de l'Homme, Paris, 2002

ご挨拶 ..... 3  
山火 正則（神奈川大学学長）

プロジェクトの目的および研究計画 ..... 4  
福田 アジオ

研究構想図 ..... 7

### 各班の目指すもの

第1班「画像資料の体系化と情報発信」 ..... 8  
福田 アジオ

第2班「身体技法および感性の資料化と体系化」 ..... 10  
川田 順造

第3班「環境と景観の資料化と体系化」 ..... 11  
香月 洋一郎

第4班「文化情報発信の新しい技術の開発」 ..... 12  
佐野 賢治

### ESSAY

#### 研究エッセイ

それは一枚の写真から始まった ..... 14  
中村 政則

中国調査 中間レポート ..... 15  
鈴木 陽一

災害展示の絵図とCG ..... 16  
北原 系子

サハラ調査ノート ..... 17  
富井 正憲

### 研究会報告 SCIENCE REPORT

地震の痕跡と名所絵  
『名所江戸百景』の新しい読み方 ..... 18  
原信田 實

画像・動作情報のデジタル入力について ..... 19  
齊藤 隆弘

主な研究活動 ..... 20

研究担当者紹介・COE研究員紹介 ..... 22

MAP・事務局・写真紹介・編集後記 ..... 23

Information ..... 24

## ご挨拶



神奈川大学学長 山火 正則

本学は、前身が旧制の専門学校（横浜専門学校、1929年創立）であったこともあり、伝統的に実学教育を重視し、優れた人材の輩出に大きな成果を挙げてまいりました。

しかしながら、他方で、大学が「研究に基づく教育の場」であるという強い認識のもとに、「研究と教育の融合」を基本理念とし、教育とともに研究面における充実に努めてまいりました。とくに、21世紀を目前にした頃からは、21世紀に燦然と輝く大学を目指し、偏差値による序列化を超えた個性的な大学になるために、研究面についても「神奈川大学の顔の見える研究」という観点から、それまでのどちらかといえば全学の研究水準を引き上げるために平均的なものになりがちであった研究支援を、重点的なものに移す方向性を打ち出してきました。例えば、本学には、日本常民文化研究所など7つの研究所がありますが、1999年からこれらの研究所予算とは別に、研究所を横断する共同研究奨励のための制度を創設し、また若手・中堅研究者の優れた研究成果に対する学術褒賞の制度を設けたのは、その現われです。こうした試みの成果は、文部科学省の科学研究費の採択に相当な実績を挙げ、さらに、工学研究科(部)や理学研究科のハイテク・リサーチ・センター、あるいは学術フロンティアの選定などに現れています。

本学といたしましては、さらに個性的・卓越的な研究を強力に推進して、その成果を後世に伝え、それを通じて国際競争力のある個性輝く大学として発展したいと考えていますが、そのためには、先に述べた重点的研究支援の方向への転換を一層明確にすることが必要です。今回、文部科学省によって採択された21世紀COEプログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』は、本学における重点的な研究支援のモデルケースとして、その方向性に弾みをつけ、ひいては本学が世界的な研究拠点のひとつとなることにより本学の「高等教育機関」としての発展をより確実なものとするものとして、大きな意義を有するものです。その意味で、このプログラムの遂行、研究拠点の形成のためには、大学は万全の支援体制をとることにしております。

最後に、このプログラムが成功裡に遂行され、研究拠点が形成されることにより、人類文化の研究がいっそう豊かなものになるよう、学内外の皆様の絶大なるご支援を御願ひして、ご挨拶とさせていただきます。

## プロジェクトの目的および研究計画

## 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の構想

福田 アジオ（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）

## 1 人類諸文化を相対的にとらえる計画

このほど21世紀COEプログラムの学際・複合・新領域の分野で採択された私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、申請者自ら言うのはおこがましいが、現代の研究課題に取り組むものであり、今後の人類文化研究に大きく貢献する計画である。

私たちの日常生活を考え、その意味を明らかにしようとするときに、文字に頼れないことは明らかである。毎日の生活の中で、文字化されたり、文字で記録されたりすることがいかに少ないかは、自分自身の生活を振り返ってもすぐ分かることである。自分史を記述しようとしたときに、旧来の方法に頼って記述しようとする、実に味気ないものになり、また行き詰まってしまう。そして、自分の人生の中で重要な意味を持ったことが文字にはほとんど記録されていないことを痛感するであろう。人々間のコミュニケーションも文字を介さずに行われることがいかに多いことか。それにもかかわらず、人々は文字に縛られ、特に文化の研究は文字に記されたものだけに価値を置く傾向が強い。しかし、文字に記録されることのない人間の行為や知識あるいは観念の方がはるかに膨大であり、多様である。今まで十分に資料化されることがなかった人間活動の文字化されない部分を対象とし、その資料化の方法を開発し、各種資料を総合し、体系化することを構想して、研究計画が作られた。

現在、世界的規模で文化の相互理解が強く求められている。自文化中心の独断的独善的思考が各地で多くの悲劇を生み出している。自他の文化を対等に認識し、理解することが世界各地での悲劇をなくす一つの道である。非文字資料の体系化によって、特定社会を背景とした文字から解放され、それぞれの文化を当事者の立場に立って内側から把握し、真に相対的に理解することを可能にする。この計画は、日本の研究から出発しているが、その特殊性や特異性を主張して日本を絶対的な存在にせず、東アジアの中で、さらには世界の中で理解しようとする。そして技術を進化させた人間と自然・環境との相互作用

を把握しようとする。さらに、身体技法・感性あるいは環境に刻まれた災害や人間活動の痕跡等を体系的に記録・収集・整理することで、人類文化研究のための共通財産を作り出そうとする。こうした資料の体系化は方法的に普遍性を持ち、国際的な研究者のネットワーク形成を可能にし、国際的に貢献することになると信じている。

昨年度から始まった21世紀COEプログラムに対して、初年度は諸般の事情で申請を見送った大学院歴史民俗資料学研究所では、昨年秋に2年度目に申請をすることを決めて準備に入った。歴史民俗資料学研究所の研究教育は、文字資料と非文字資料の両者を対等に位置づけることを基本的理念としてきた。しかし、文字資料についてはすでに膨大な研究蓄積が学内外にあり、世界的にも研究が進展している。それに対して、文字に表現されない人間の様々な行為、思考を資料化する方法は必ずしも開発されてこなかった。文字によって表現されたものに価値を見いだす考えが人々を縛っていたのである。私たちの計画は歴史民俗資料学研究所の2本柱のうち改めて後者の非文字資料に絞り、研究計画を立てた。その意味は、上述のような、地球上の様々な人々の生活を対等平等に認識することを可能にする資料の獲得を目指すからである。これは今日の新しい学問に要求される重要な課題であると認識している。

## 2 研究蓄積を活かしたプログラム

私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は手品のように全くの無から有を作り出す計画ではない。私たちの先輩や私たち自身が蓄積してきた研究やその基礎にある資料化の方法を前提にしている。そもそも大学院歴史民俗資料学研究所が基礎学部をもたない研究所として10年前に開設されたのは、その前提として神奈川大学に付置された日本常民文化研究所（常民研）の存在があった。常民研はアチックミュージアムとして1920年代後半に本格的活動を開始して70年以上の年数が経ち、それが神奈川大学に招致されてからでも20年が経過している。

アチックミュージアムの群像（収集資料を身につけて、後列中央が渋沢敬三、1937年）  
神奈川大学日本常民文化研究所蔵

日本常民文化研究所はその80年近い活動のなかで、日本では数少ない非文字資料の集積と研究を行い、豊富な研究蓄積がある。研究所の創設者渋沢敬三は、当時としては珍しい各地の生活の映画撮影を行い、また写真を撮り、膨大な映像資料を残してくれた。また研究所の事業として、図像の資料化を試み、世界的に見て類のない『絵巻物で見た日本常民生活絵引』を発行した。渋沢敬三の字引ではなく絵引きをという発想で作られたそれは、日本中世に限定されたものであるが、図像が生活文化研究にとってどれほど豊かな資料になるかを示してくれた。また、民具という用語は渋沢敬三によって作られたことが示すように、常民研は日本における民具研究の拠点として存在してきた。現在も『民具マンスリー』を月刊で刊行し、日本の民具研究に大きく貢献している。私たちの計画は、この常民研の研究蓄積を前提にし、それをさらに日本から東アジアへ、そして世界へ発展させることで、常民研の開発し、また蓄積してきた方法や資料を人類文化研究のための共有財産にすることを構想した。

また、常民研の活動蓄積を基礎に設立された歴史民俗資料学研究所も、先に記したように、研究教育の柱をオーソドックスな文字資料と今後の開発を待つ非文字資料の二つにおいている。非文字資料については、表現としては民俗資料学と称しているが、狭い意味での民俗ではなく、文化に近い幅広い概念として捉え、研究教育を行い、僅か10年でありながらすでに少なからぬ研究者を生み出し、専門的職業人も多く出している。歴史民俗資料学研究所は創設当初から博物館専門職員の再教育を中心とした高度専門職としての学芸員の養成も目標にしている。今回のプログラムにおいては、歴史民俗資料学研究所のこの目標を研究計画に結びつけ、世界的に活躍する若手研究者の養成を目指す実施計画を立てた。

今回の計画は、このような歴史民俗資料学研究所と日本常民文化研究所が一体となって計画し、さらに日本から東アジアへと研究が展開するために東アジア研究で実績をあげている大学院外国語学研究所中国言語文化専攻の参加を求め、また実施に当たっては研究課題にかかわる多くの研究分野の研究者に学内外から参加を求めた。そのために、COE共同研究員を制度化し、20名の事業推進担当者に加えて、学内6名、学外11名の研究者を共同研究員として委嘱し、共に研究に従事して貰い、目的を達成することにした。これも研究実績を基礎に研究を進展させて目標に達するための努力である。

## 3 四つの研究班で研究推進

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という課題は大きい。限られた5年間で達成できる目標を設定しなければならない。非文字資料の対象を大きく三つに限定して設定した。第一は図像、第二は身体技法・感性、第三は環境と景観である。この三つを柱として、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料で分析をするというものである。そして、重要なことは、第四の柱として、これらの非文字資料を活用し、世界に向かって発信する方法を開発する課題を設定した。これをそれぞれ研究班として編成する。そして、それぞれの研究班には三本の研究課題を設定した。したがって、私たちの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は四つの研究班、12の研究課題によって構成される。そのおおよその計画を示すと以下の通りである。

第1班は図像資料の体系化を課題とする。先に紹介した日本常民文化研究所の誇るべき研究蓄積である『絵巻物による日本常民生活絵引』を国際的に利用可能にするため、本文の英語訳、キャプションの英仏中韓国語訳を付けたマルチ言語版の編集発行をする。『日本常民生活絵引』の対象は中世までであるので、それに次ぐ近世・近代生活絵引きの編さんを行うための資料収集とその解析を行い、5年目にはその刊行を開始する。そして東アジア生活絵引き編さんのための資料収集を行い、データベースを作成し、公開する。

第2班は身体技法と感性の資料化を課題として、ほとんど資料化されることのない身体技法を資料として定着させる方法を開発し、諸文化間の比較研究を行う。そのために日本だけでなく、ヨーロッパやアフリカでも調査を行う。次に感性を把握する方法をフランスのアナール学派

の検討を通して明らかにすると共に、その具体的な調査研究を行う。また民具をそれを用いる身体技法との関連で把握する調査を日本各地で実施し、さらに東アジアにおける民俗芸能の所作を身体技法として把握し、分析する。



渋沢フィルム一枚（鹿児島県大島郡喜界町湾、1935年撮影）  
神奈川大学日本常民文化研究所蔵

第3班は環境と景観の資料化を課題とする。まず、日本常民文化研究所が所蔵する渋沢敬三などが撮影した映像（渋沢フィルム）を分析し、それと現状との比較を通して環境の変化を明らかにする。また人々の環境認識の変化を日本列島各地の民俗調査によって明確にすることで、人間と環境との関係を明らかにする。さらに災害あるいは戦争などが大地に刻印した痕跡を調査把握する方法を開発し、日本各地及び東アジア各地で調査する。

第4班は、文化情報発信の技術開発を課題とする班である。上記三つの研究班の研究成果の上に、新しい情報発信技術の開発を行う。まず従来の文字資料・非文字資料を含んだ資料の伝存形態の世界的調査を行うと共に、非文字資料の収集・整理・情報化の方法を開発し、種々の試みを通して世界に発信する。この過程で、非文字資料に専ら依拠する博物館学芸員の高度専門職としての確立を目指して、大学院における博物館資料、博物館展示に関する研究教育の方法を開発し実践する。

以上の各班の活動は独立的に行うのではなく、相互に関連させ、互いに刺激しあう形で進める。そのため、研究担当者全体の会議と研究会を頻繁に開催することを計画している。そこでの議論が各班に持ち帰られることで、全体として研究を深めることになる。

#### 4 研究成果とその社会的意義

このプログラムは、四つの班がそれぞれに研究成果をとりまとめると同時に、それらを総合して全体として課題に迫る研究報告書を刊行することを予定している。各

班の成果は、班の対象によって異なり、データベースの作成公開、資料集の刊行、調査報告書の公刊、研究会や国際シンポジウムの開催とその記録集の公刊、班の課題に応じた論文集の公刊など多くの成果公表を予定している。また4班のように、新たな情報発信方法を博物館展示として試みる。早くも来年度にはその研究成果の一部は姿を見せることになっている。

5年間の研究を経て、歴史民俗資料学研究所を中心として、日本常民文化研究所、中国言語文化専攻は世界的な研究拠点を形成するはずである。この拠点は世界の研究者とのネットワークを形成し、様々な形態の非文字資料を集積し、さらにそれを再編成して世界に提供する非文字資料研究センターとしての役割を果たすことを期している。この5年間はのための基盤構築の時期と位置づけられている。研究開発だけでなく、データベースの作成にかかわる作業も着実に進め、信頼性の高い情報を世界に提供したいと考えている。研究の途中経過や中間成果としての各種データベースも各種の媒体を通して公開する計画を立てている。

公開の有力な方法は言うまでもなくホームページである。独自のホームページを開発し、プログラムの全体像を示すだけでなく、研究会の記録を掲載し、また作成した各種データを公開する。また、年に4回ニュースレターを発行して、研究調査で得た新知見を速報し、また年度末には年報を発行して、その年度の研究成果をとりまとめて公開する。そして、調査研究に関連する提言や批判を学内外の方々から貰いたいと思っている。ホームページやニュースレターはそのためにも大いに役立つものと思っている。

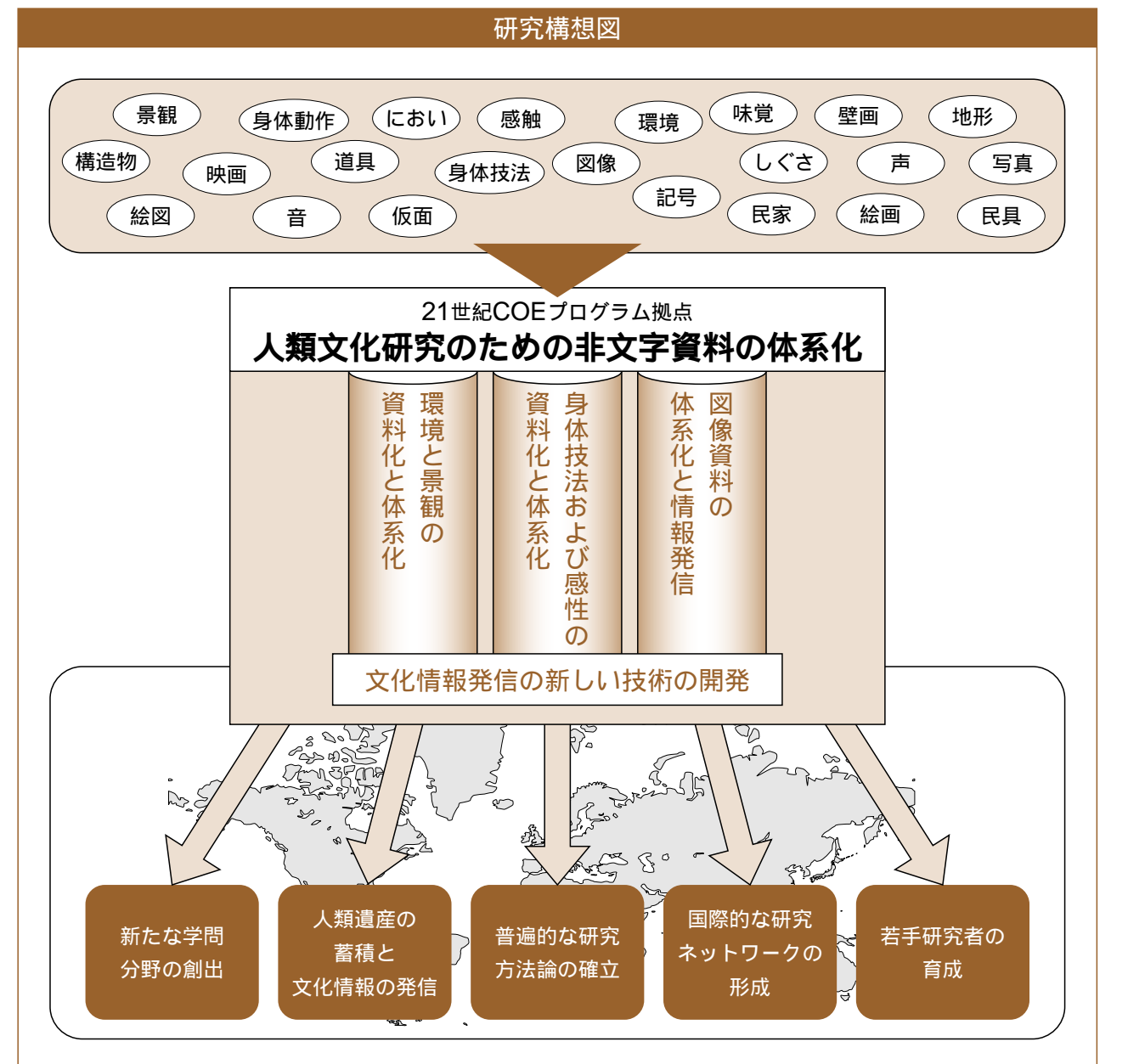
COEプログラムの大きな目標は、世界的に活躍することができる若手研究者の育成である。私たちのプログラムでもそのための工夫と努力を行うつもりである。制度としては、すでにCOE研究員(PD)とCOE研究員(RA)を設け、実施している。COE研究員(PD)は、博士の学位を取得して未だ研究職に就職していない若手研究者を対象にし、研究員に採用することで、彼等の研究の進展を援助すると共に、私たちのプログラムの研究も深まることを目標としている。私どもの課題に関連する分野では、博士の学位を取得しないで退学することも少なくないので、そのような所定の単位を取得して博士課程を退学した者も採用対象としている。PDは本年度はすでに3名を採用し、10月から勤務している。COE研究員(RA)は研究拠点となる歴史民俗資料学研究所と中国言語文化

専攻の博士後期課程在籍学生をリサーチアシスタントとして採用し、研究業務を補佐してもらい、また本人の研究を指導し支援するものである。本年度は3名の採用を決めている。PDやRAの研究の進展を支援する方策として、課題に応じて海外での調査研究を行うための派遣を計画している。また研究成果を年報その他に発表する機会を設ける。

さらに拠点形成を行う歴史民俗資料学研究所や常民研、あるいは中国言語文化専攻そのものの研究の活性化をCOEプログラムの実施過程で図ることも当然ながら不可欠なことである。COEプログラムは基本的に博士課程（神奈

川大学では博士後期課程）を対象にしているが、長期的な展望に立てば基礎的な足腰を強くすることが不可欠であり、修士課程（神奈川大学では博士前期課程）の研究教育にも一段と工夫をし、全体としてCOEプログラムの拠点に相応しい大学院とすることを考えている。

COEプログラムだけが独立して活動するのではなく、歴史民俗資料学研究所や常民研と一体となって拠点形成を目指し、その実現が神奈川大学の研究基盤の充実なることを期すと共に、非文字資料を主として研究してきた諸学問に大きく貢献することを夢見ている。大方のご支援をお願いしたい。



## 各班の目指すもの 第1班

## 図像資料の体系化と情報発信

福田 アジオ (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授)



本プログラムの中で第1班は最も分かりやすい課題を設定している。先ず資料化する対象が図像である。人間は文字を読んだり書いたりしなくても、古くから様々な図像を描いてきた。ラスコーの洞窟壁画や弥生時代の銅鐸の絵などはよく知られているし、現代でも文字にせずに絵画や図に表現することは多い。非文字資料というとき、図像を第一に思い浮かべる人も多いであろう。しかも、拠点である日本常民文化研究所には『絵巻物による日本常民生活絵引』という世界的に類を見ない大きな研究成果がある。この常民研の成果を世界的な共有財産にすると共に、それを継承発展させて現代に意味ある新たな生活絵引きを作り、またデータを提供するのが第1班の研究活動計画である。

したがって、第1班の研究は、『絵巻物による日本常民生活絵引』の成果を継承すると共に、その問題点を検討し、現代に有効な新たな絵引きを作成することを大きな内容とする。先ず継承するという点では、特定の時代の人々(常民、民衆、庶民)の生活の具体相を示す絵画資料を集成し、それを「絵引き」としての窓口から再編成し、編さんすることである。渋沢敬三が字引と対比して

の絵引きという用語を作り出し、新しい資料集を刊行したことを継承する。即ち、絵を窓口にして過去の特定の時代の生活を知るのである。しかし、『常民生活絵引』には種々の問題が含まれている。当時の技術でやむを得ないことであったが、絵巻物から模写によって資料化しており、その段階でデフォルメされた面も少なくないと考えられる点、また描かれた事物に与えた名称が描かれた時代の表現もあれば、現代の表現もあるというようにまちまちである点など、いくつも指摘できる。それらの弱点を克服して、現段階で活用可能な絵引きを作り出すことが大きな課題である。

5年間の間に達成できることを明確にしなければならない。第1班の達成目標は、第一に『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編さんと出版である。絵引に付された絵から読み取った解説文を英語訳し、描かれた事物に付された名称を英語、フランス語、中国語、韓国語に訳して、世界的な図像資料にしようとするものである。これは困難を伴う作業であることが最初から予測されている。日本の事物を如何に他の言語に翻訳できるかという大問題が横たわっている。英語にしても、和英

辞典のように日本語に対応する単語に置き換えるだけではできない。そうかといって、事物の内容を説明する文章にしたら長大なものになり、日本語版の大きさははとも収まらなくなる。研究は始まったばかりであるが、すでに翻訳を巡る諸問題が噴出し、研究会は議論百出の状態である。これを本年度中に集約し、来年度には本格的な翻訳に入る予定である。

第二の達成目標は、5年後に近世・近代生活絵引きの一部を刊行開始することである。近世編と近代編に大きく分けて、各種の刊行物から図像を収集し、図像に名称を与え、さらにその配置全体から意味するところを読み取る作業を進める。近世、近代に書かれた図像は無数といって良い。その中から主として観察や経験によって生活を描いた図像を選び出し、それをデジタル画像化し、描かれた内容を解析して、名称を与え、また描かれた全体を読み取る。そのために、まず最初に取り組むのが、近世・近代に描かれた図像が収録された文献の詳細な書誌データを収集することである。本年度から2年間で詳細な図像文献書誌データベースを完成させ、公開する予定である。その上で、デジタル化する図像文献を決めて、画像を取り込み、資料化を行う。近世・近代生活絵引きを構想しているが、5年後に刊行を開始できるのはその第一期ということになる。

第三の目標は、東アジア生活絵引の編さん作業である。具体的には朝鮮半島と中国の図像資料を収集し、『絵巻物による日本常民生活絵引』と同様に生活の場面を抜き取り、事物に名称を与え、また読み取った内容を解説していく。日本とは異なり、広大な地域であり、資料採集対象も膨大なものがある。それを如何に絞り、如何にデータ化するのかが大きな課題である。地域差も考えなければならぬ。また日本のような生活を経験や見聞を基礎に描くことも余りなかったとされる。そこで、日本と同様に、先ずは図像文献書誌データベースを作ることからはじめたい。そして、日本の図像に対応するような図像を取り出し、デジタル画像化を進めたい。最初の2年間は書誌データベースの作成を中心とする。また韓国や中国の現地調査によって図像と生活との関係を明らかにしていく。

以上のように、研究班としては三つの課題を掲げ、その達成を目指す。文章にも「作業」という表現を用いたように、研究開発というよりも、作業という側面が強い。しかし、作業の過程では、様々な問題点を検討し、図像資料の性格を明らかにし、また将来的には欧米の図像についても同様の生活絵引きの作成可能な方法を開拓していくつもりである。日本、東アジア、さらにはヨーロッパやアメリカ、アフリカなどの図像に関する情報を是非とも寄せていただきたいと願っている。



祭りにはしゃぐ子供たち  
元禄16年(1703)成立の『四季耕作子供遊戯図巻』  
(神奈川大学日本常民文化研究所蔵)の中の一枚

近世農書に描かれた図像(神奈川大学日本常民文化研究所蔵)  
右:大蔵永常『豊稼録』(農家調宝記統録)稲刈りと掛干の図  
左:大蔵永常『除蝗録』(農家調宝記統録)虫送りの図



『絵巻物による日本常民生活絵引』

各班の目指すもの 第2班

## 身体技法および感性の資料化と体系化

川田 順造 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授)



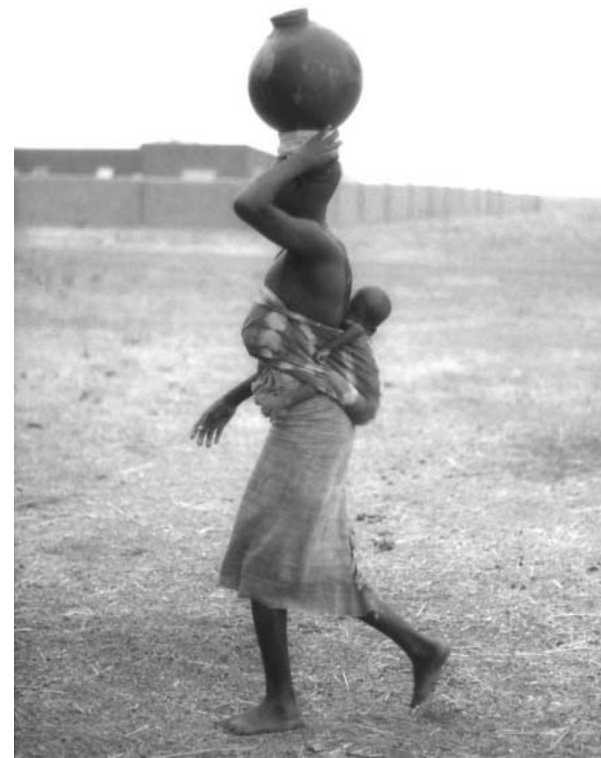
球形の土器を作る独特の技術が発達している。

第三に、赤ん坊のおぶい方に注目しよう。日本の「おんぶ」では、赤子はおぶってくれる人の背中の上の方に固定され、両肩に手を掛けることもできた。赤子の両脚は軽く曲がって開いた状態になる。ところがこの写真では、赤子は背の下の方、尻の上に、両脚を付け根から深く曲げた格好でくくりつけられている。これは西アフリカ住民の体形が、脊椎の下方で前方湾曲しているところからきている。この地方では授乳期間も長く、日本の畳や板の間で一般的だった這い這いが、住居の構造上できないため、赤子は母親が歩いたり作業をしている間も、こういう姿勢で固定されている。

赤子のおぶい方に私が注目するのは、この赤子の姿勢が、西アフリカの作業や休息の姿勢にきわめて多い、上体の深い前屈姿勢と、それを90度回転させた投げ足姿勢とよく対応しているからだ。日本のおんぶの仕方や、中部・東北地方で広く用いられた「エジコ」など、浅い円筒形の容器に赤子をあぐらをかいた姿勢で閉じこめておく保育法と日本人の低い座位の作業・休息姿勢、ヨーロッパで行われていた、新生児の両脚を真っ直ぐ伸ばしたまま布で巻いて固定したり、歩く前の赤子を、這わせないために立てておく木や藁で作った筒、水平に回転する木の腕で上から吊す道具と、ヨーロッパでの立位や高座位の作業・休息姿勢と対比すると、それぞれの保育法の特殊性が、成長してからの身体技法との関連でよく分かる。

一枚の写真という「非文字資料」から引きだせる問題について述べたが、身体技法(文化によって条件づけられた身体の使い方)としての頭上運搬や赤子のおぶい方、壺という道具や、球形の壺を作るこの地方特有の技術などについての問題意識があっはじめて、この「非文字資料」も活用できる。そしてそのような問題意識は、西アフリカとは著しく異なる日本やフランスの同種の事柄との対比の中で、意味をもってくるのである。

第2班の課題は、いま一例を見たような、身体技法、道



非文字資料である、この一枚の写真(1976年、西アフリカ・ブルキナファソで川田撮影)が、どれだけ豊かな情報を含んでいるか。まず、見事な頭上運搬。重力が真下におりる合理的な運搬法であり、かつては日本を含む世界の広い地域で行われていた。ただ、特殊な身体技法を要するのと、髪結い被り物との関係などから、次第に他の運搬方法に取って代わられた。次に球形の壺。この女性が運んでいるのは空の壺だが、水、酒などの液体をみたした場合、球形は最も安定した運びやすい形だ。底の平たい容器だったら、中の液体が揺れ、重心が片よってこぼれてしまう。球形・半球形の土器は、西アフリカ社会で鍋としても広く用いられているが、中華鍋の例を挙げるまでもなく、円い底の鍋は火のまわりがよく、調理がしやすい。電熱の調理器が普及する前、日本の飯炊き釜も、鍋も、底が半球形だった。そしてこの地方には、

具、技術文化だけでなく、それらと密接に関連する、さまざまな感性、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどを通じて感知されるものはたらく領域や、相互の結びつきを明らかにしてゆくことである。まさに「非文字資料」

を活用しなければできないことであり、既成の研究が乏しいこの分野で、私たちCOEの研究に課せられた任務は、難しいが、やり甲斐があるといわなければならない。

各班の目指すもの 第3班

## 環境と景観の資料化と体系化

香月 洋一郎 (神奈川大学日本常民文化研究所・教授)



本プロジェクトの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトル自体、たいへん曖昧な一面もっています。「文字資料以外のすべて」というものがその対象なのですから。そして私たちの班のテーマ、「環境と景観の資料化と体系化」という表現もそれに負けず劣らず雲をつかむような茫漠さもっています。身のまわりをとりかこみ、眼前に広がる世界のすべて、それを対象として資料化し体系化への道を探ろうというのですから。班の構成スタッフも、その専攻は歴史学、地理学、民俗学の三分野にわたり、プロジェクトが動きだしたばかりの今、ここでその着地点を明確にしぼりこむ形での説明は大変困難です。

もとより、とらえなければならないのは「環境」、「景観」といわれる複合的な事象のなかに存在する人間の意思のありようです。といってもその意思とは、為政者の統治感覚や姿勢のあらわれのこともあり、生産者の生産の場への配慮の場合もあり、またきわめて即物的な対応の結果もあり、ある営みが権利として認知されたプロセスの反映の場合もあり、シンボリックな意味が展開していく場の事例もあるでしょう。こうした世界では前の時代の矛盾が次の時代の可能性ともなり、その時代の「正義」がやがてそれとは異なるものへと転化していくこともあり得ます。

「環境」や「景観」といわれる世界の中には、それがどんなに激しくまた多彩に変化していても、そうした人間の営為のあゆみが、一見それとは気づかぬ形で、しかし明確にとどめられていて、私たちに語りかけてくれてい

るように思います。対象がどのように奔放で混沌としているように見えても、あるいは茫漠としていても、そこにはある類型やそうした重層が潜んでいます。それは人間社会を規制するものであるとともに、可能性を秘めている土壌でもあります。とらえどころのないように思える世界から、それをどのように浮きぼりにしていけるのか、そこにあらわれる時代性、社会性とはいったい何なのか、そうした模索の手の内をまず方法として示し得ること、換言すればそれが私達のテーマになると思います。

そのための具体的な道すじとしては、とりあえず日本常民文化研究所の1930年代の生活記録写真や映像——写真は通称「渋沢フィルム」、現在活用可能なものは約4000点ほど——を活用しての景観の分析や時系列的な研究、日本の山村と島をいくつか選び、環境認識、景観認識とその変遷の調査研究、さらには 様々な人間の活動——この場合は主に政治的、政策的な背景をもつものや、また災害が社会にのこした痕跡の解説——の研究とそのデータ化、といったことを主要な柱にしてすすめていくつもりです。

前述したように、その対象世界は一見とりとめなく広がる世界です。その中から、人間社会を考えていくためのデータのすくいとり方を検討し、いやさらに踏みこんでいけば、データという言葉の意味するものの再検討を含めて新しい研究対象の世界を発見し、それを解読していきたいと希望しています。もちろんその先には、そうした成果と文字資料の関係性の追求、またそれをどう社会に発信していくのかといった問題があることは言をまちません。

非文字資料をデータ化すること、また文字表現を媒介とする研究の場で検討するという自体、作業として矛盾を含んでいます。その矛盾とどう向きあうのか、それは研究者の個々のイマジネーションや洞察力がひとつの支えとなるでしょう。そうしてそのような問題意識を基にした研究会でその道筋をより明確にしていきたいと思っています。そうである以上、各々の内にある時代や社会や地域に対する認識とその足場として明確に示しあ

うところから始めなければなりません。ここで方法とは模索のスタイルの明示から離陸をし始めることになります。



花蓮県忠烈祠に改変された旧花蓮港神社（戦前は県社）



海辺に家々が短冊状に並び新潟県出雲崎

各班の目指すもの **第4班**

## 文化情報発信の新しい技術の開発

佐野 賢治（神奈川大学大学院歴史民俗資料学専攻・教授）



第4班は、70年以上にわたる日本常民文化研究所の画像・民具・写真資料に関する調査研究の蓄積を踏まえた1班から3班による資料の体系化の作業と共同しながら非文字資料を文化情報として発信するシステム、および新しい技法に習熟した専門技術者養成方法の開発を目指します。このプロジェクトの主題は、非文字資料、文字に表現されない人間の諸活動を資料化し、それを体系化することですが、わが班では、文字資料の伝存形態もその視野に入れながら、人間の諸活動のあとに残されたすべてを資料と捉え、大きく資料のあり方から人間の営み、生活

を追及することが可能であることを第一の前提として考えています。

第二に、画像、身体技法・感性、環境と景観、それぞれの具体的な資料の体系化を目標とする他の班と違い、第4班は、対象 資料化 データ化 体系化 公開化 と資料処理のすべての段階をソフト・ハードの両面から扱います。そのために班員は文書・民俗・民具資料の伝存形態や資料の制度的・社会的な扱い、情報理論・工学に関心を持ち、アジアや欧米の資料館（博物館・文書館・美術館など）の事情に詳しいもので構成さ

れています。

第三に第4班には、文化情報発信のためのシステム開発、資料館に勤務する高度専門職業人（シニア・キュレーター）養成方法の開発という二つの大きな目標を実現するためのプロジェクトグループの性格が強く要請されています。この二つの目標の実現の可能性を博物館展示や建設を結節点として提示できればと考えています。

上記の点を踏まえて、具体的な作業として開始するのはとして、国内では、福島県只見町において民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作撮影・民具写真・実測図 民俗誌の裏付け 文書資料との整合 環境景観の変遷との比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性解明また地域振興のための情報発信の場としての博物館のあり方を提示、国外では、中国・雲南省麗江にある東巴文化博物館・東巴文化研究所との協力関係の下に納西族の東巴儀礼・東巴文字・東巴經典の関係性を、身体技法（東巴儀礼）画像化（象形文字）文字化（東巴經典）口承化（神話・年中行事）の諸相から把らえ、身体技法の体系化の具体例として位置づけます。多様なさまざまな性格を持つ中国少数民族の儀礼伝承をはじめ、非文字資料の扱い方モデルの一例を納西族の例で提示できれば、人類文化研究のための非文字資料の体系化という目標に沿うことにもなります。また新たなユネスコの無形の世界遺産の考え方に対するモデル的作業としての志向も目指します。

さらに、考慮にあがっている活動として、写真資料のデータ化・体系化があります。日本常民文化研究所所蔵渋沢



上棟式の実際と職人巻物に描かれた図（福島県只見町）

写真の修復・保存技術開発、写真資料の時間軸・分野別データ化、また日系海外移民はじめ海外の日本関係写真資料のデータ化および写真資料公開化のシステム開発です。

のシニア・キュレーター養成プログラムの開発については、学芸員養成の現状と問題点の検討、欧米のキュレーター制度の比較検討、博物館と地域社会・学校教育の関係性などを論議しながらそのシステムの開発をソフト・ハードの両面から考えていきます。そのために、博物館キュレーター制度において長い伝統を擁する欧米の養成プログラム、また類似の文化環境を有するアジア各国の博物館のあり方、博物館制度および学芸員制度を調査検討します。

以上の作業を班員及びPD、RA及び現地の研究協力者との共同研究の下に進め、中間報告を研究会及び年次報告で発表しながら、その成果は、国際シンポジウム『もの・モノ・物の世界 人間の諸活動と非文字資料』開催、日本常民文化研究所展示室において人間の諸活動の結果としての資料から人間の営みを総合的に捉える実験展示『ホモ・マテリアル 人と資料』で公開できればと考えています。このプロジェクトのホーム・ページも文化情報発信の新技术として積極的に位置づけ、最新のIT技術を駆使したコミュニケーション展開の方法も試行していきます。学芸員・アーキビスト等高度専門職業人養成プログラムに関しては大学院博物館学講座を開講し、資料を総合的に扱い、企画力のあるシニア・キュレーター養成カリキュラムを編成するとともに、博物館学芸員の再教育のシステム開発にも力を注ぎます。



（左上と左下）現行の東巴儀礼と東巴文字（儀礼の象形化）（右上と右下）葬式に使われる神路図（中国雲南省 納西族）

## 研究エッセイ

ESSAY

## それは一枚の写真から始まった

中村 政則 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授)

## ① 薄命の大正デモクラシー

ここに一枚の写真がある。1928 (昭和3)年、わが国最初の普選における民政党的立看板である。若槻礼次郎、永井柳太郎などに交じって、「民政党公認候補者 月桂冠児」あるいは「衆議院議員候補者 公認 当選確実」などの立看板もあって面白い。選挙は2月20日に実施されたが、選挙結果をみると若槻礼次郎の名前が無い。ちなみに与党政友会総裁の田中義一の氏名も新聞には載っていなかった。私は驚いて、『衆議院議事録』や両党の党報などを当たってみたが、若槻・田中両党首は貴族院議員であって、じつは衆議院選挙には立候補していなかったのである。とすると、衆議院に席を置く総理大臣はいったい何人いたのであろうか。調べてみると、驚くべきことがわかった。

1885 (明治18)年に内閣制度が開設されてから (初代総理大臣は伊藤博文)、終戦内閣の鈴木貫太郎首相まで延べ42人の内閣総理大臣がいるが、そのうち選挙の洗礼を経て、衆議院に議席をもつ総理大臣は、次のわずか三名にすぎなかったのである。すなわち、「平民宰相」の原敬 (岩手県) 民政党的浜口雄幸 (高知県) 政友会の犬養毅 (岡山県) の三人だけである。勿論この事実は定評ある日本政治史の研究書にも書かれていない。私は心配になって、友人の政治史の専門家に電話して尋ねてみたが「えっ」というだけであった。数ヵ月後、作家の城山三郎氏と対談する機会があったので、そのことを話すと「そんな大事なことを何故書かないのですか」といわれた。後日、その対談を読んだ磯田光一氏が『戦後史の空間』(新潮社、1983年)で、この事実を早速引用していた。それ以来ほぼ20年以上が経過したが、私の「発見」に異を唱えた研究者は一人もいない。

わが国の政党政治は1932年の5・15事件で止めを刺され、1936の2・26事件をさかいに軍部独裁へ向かうが、実は大正デモクラシー期において日本の議院内閣制は実質的に機能していなかったのである。大正デモクラシーがなぜ「薄命のデモクラシー」に終わったかを解くこと



は、近代政治史の難問の一つであるが、はからずも私は一枚の写真から、戦前における「制度としての民主主義」の度合いは、予想外に底の浅いものであることを知った。

## ② 非文字資料と文字資料

私の専門は経済史であり、非文字資料から最も遠いところで研究してきたような気がする。しかし、30年ほど前から、私は文献中心の歴史学では限界があり、時代と人間を描くにはオーラルヒストリーや絵画、写真などの非文字資料を活用すべきであると考えていた。拙著『労働者と農民』(1976年)の冒頭に農作業でひび割れた「21歳の嫁の手」を掲げたが、あの写真が読者に与えた衝撃の大きさは、私にも驚きであった。また山本作兵衛の『筑豊炭鉱絵巻』も炭鉱夫の労働と生活の実態をビビッドに描く上で不可欠であった。その意味で、私は歴史学ももっと図像、絵巻、伝承、聞き書きなどを多用すべきであると思っている。しかし、非文字資料はそれ自体ではものを言わない。そのことは文字資料も同じであって、調べる側が能動的に働きかけたときにのみ、ものを言い出すのである。したがって、非文字資料を読み解くためには、文字資料に補完されなければならないし、逆もまた真である。最近では、日本中世史、近世史でも絵巻物などの図像を解説、解析した研究が盛んである。私も我々のプロジェクトがCOEに採択されたのを機会に非文字資料と文字資料の関係を深く考えてみたいと思っている。

## 研究エッセイ

ESSAY

## 中国調査 中間レポート

鈴木 陽一 (神奈川大学大学院外国語学研究所・教授)

去る10月、筆者は河南省開封市、江蘇省南京市、上海市を回り、第一班のテーマである「図像資料」の各地の収集状況などについて予備調査を行った。以下はその報告である。

## ① 河南省開封市

今回調査したのは山西・陝西・甘肅三省の商人たちが共同で建立し、関羽を祀った会館で、規模は意外に大きく、その木彫、石彫は精緻を極めている。特に木彫は彩色が施されている上に、通常の小説、戯曲をテーマにしたものではないものと思われ、大いに注目されたが、よく見ると、服装が清朝のものではなく、「清明上河図」を下敷きにした可能性も含めて他の資料と照らし合わせ、詳細な検討が必要である。なお、開封市では河南大学の中文系、民俗学の諸先生の協力を受け、貴重な資料の恵投を受けたことを付記しておく。

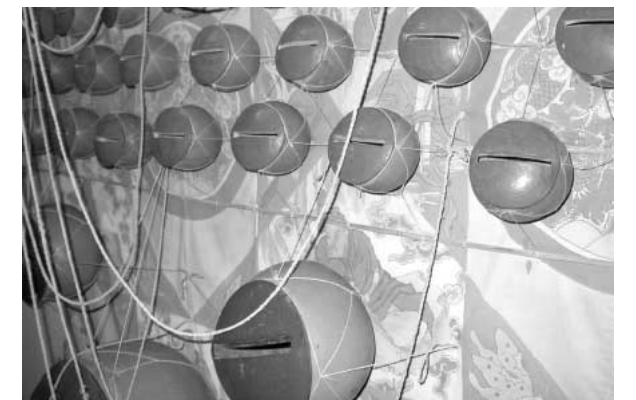


河南省開封市山陝甘會館の木彫

## ② 江蘇省南京市

今年の7月東京で開かれたシンポジウムで、偶然南京博物院民俗民族研究所所長徐藝乙氏と知り合い、今回同博物院を訪問し、収集資料を見学することができた。残念ながら、同博物院は設立七十周年にあたり、記念式典の前日の見学となったため、式典のリハーサルを横目で見ながらの慌ただしいものとなった。しかし、民俗関係の

展示は充実しており、1930年代に収集された貴重な資料の中には、ナシ族のトンバ教の経典や、ホジェン族のシャーマンが利用した祭祀用具なども含まれ、今後共同調査研究によって、我々が求めるような資料の発見も可能ではないかと思わせた。しかも多くの資料については、いまだに目録も整備されていないとのことなので、本博物院の資料については年末に再度調査を行い、そこで明年以降の調査、研究の方向付けをしたいと考えている。なお、写真は館蔵の山東の大風で、高さは3m余り。布地に『水滸伝』の英雄たちの姿が描かれ、巨大なウナリが数多く付けられている。



南京博物院所蔵 山東省の大風

## ③ 上海

本学卒業生沈麗雲女史が上海図書館に勤務していることを知り、館蔵資料の調査に協力をお願いしたところ、女史は快諾され、今後の共同研究について話し合いを行った。今回は担当副館長が出張のため、残念ながら直接資料を見ることができなかったが、館蔵民間版画集の恵投を受け、COEの資料に加えることができた。これらの資料の大半は戦前に収集されたものであるが、調査研究は一部の作品のみに対して行われているにすぎない。民間版画の収集点数は一万点とも、数千点とも言われており、年末に再調査を行い、明年以降中国側と協力のうえ目録の作成を目指したいと考えている。



## 研究エッセイ

ESSAY

## 災害展示の絵図とCG

北原 糸子 (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・非常勤講師)

今年の夏、佐倉市の国立歴史民俗博物館（以下歴博とす）において、「ドキュメント災害史」展を行った。この展示は外部公募型展示と呼ばれる新しい形のものであった。

江戸時代に全国各地で発生した自然災害、特に地震、津波、噴火などの地球構造上の変化によって発生する突発的な災害について、記録、絵図などを理科系と文系の研究者が協力して分析し、その結果を展示でわかりやすく解説しようというものである。災害学者が歴史資料を重視するのは、いまに始まったことではない。こうした自然災害は一定の周期性があるので、過去の災害履歴を調査・分析すれば、将来発生する可能性のある災害の予知に繋がるという、防災上からの観点からも理学・工学系の研究はすでに数段進んだ領域を築いている。歴史学ではこうした領域の体系的な研究は立ち遅れている。

さて、江戸時代においても大規模な地変を伴う災害を体験した人々は、これを詳しく伝えようとさまざまな工夫を凝らした。たとえば、善光寺地震（1847年）の場合には、地震で山が崩れ、河を堰き止め、それが決壊して洪水が起きた。二次災害、三次災害の地変を、色を変えたり、二枚の絵図に分けたりして、表現している。

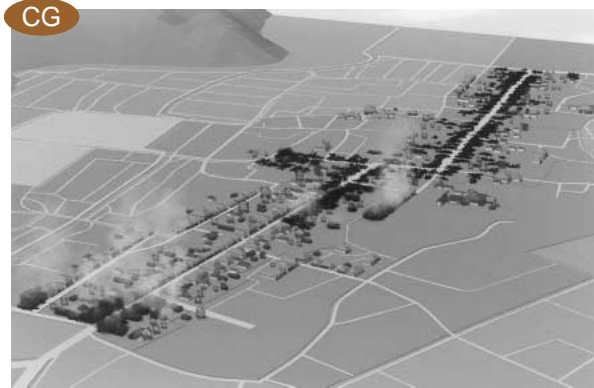
噴火の場合には、火山灰の降った地域に添付の別紙を掛けると降灰の範囲がわかるように工夫されたもの（1783年天明浅間噴火）噴火による山体崩落で発生した津波を同じように別紙の掛け絵を重ねるように工夫されたもの（1792年寛政雲仙普賢岳噴火）など、大規模な変化がおきたことを伝える知恵が発揮されていたことが、現物をつぶさに眺めることのできる展示ではよくわかるのである。

これが現代になると、CG、コンピューター・グラフィックというものになる。まず、過去の資料から、地震なり、津波なりの発生のメカニズムを分析、モデルを数値的に置き換えて、これをコンピューター上で画像再現することになる。今回の展示では、理系、工学系の研究者の既存の研究結果の提供を受け、一般向けに映像化したものを6件制作した。災害の内容について周知しているデータ提供の研究者からは、画像が粗い、表現が拙いな

ど、必ずしも高い評価を受けなかったが、一般の観客は、迫力がある、わかりやすいとなかなかの好評を得た。

専門家と一般の観客とのこうした反応のちがいはなかなか興味深い問題が含まれているような気がする。まず、専門家は災害絵図をそこからどんなデータが得られるかという、のっぴきならない関心で見つめるから、複製画ではなく、本物を求め、読み取りにくい文字や表現を詮索する。素人は古臭く、なにが書いてあるかわからないような絵図は歓迎しない。それよりも、災害でなにが起きたのかを時間経過も含め、わからせてくれるCGはともかく入りやすい。因みに、善光寺地震で、宿場のほぼすべての家並が消失した千曲市稲荷山の災害絵図とCGをご覧ください。

CGの元データの画像や資料と、CG映像をともに展示したので、観客にも納得してもらえたと思っている。



「稲荷山宿火災延焼動態図」(3月25日午前12時ごろ)  
弘化4年3月24日夜10時頃発生した善光寺地震による稲荷山宿の火災延焼状況を再現した。この火災により稲荷山宿の大半の家屋は焼失した。  
(京都大学防災研究所：田中哮義、中尾美穂、飯田健太郎 製作)



「稲荷山宿略図」(松林家文書)  
地震後の四ヶ所の発火点とそれぞれの焼失範囲が描かれている。

## 研究エッセイ

ESSAY

## サハリン調査ノート

富井 正憲 (神奈川大学工学部建築学科・助手)

第3班の「環境に刻印された人間活動 海外神社」グループ中島・大里・孫・藤田・富井5人のメンバーは第1回目の海外神社追跡調査を10月8日から13日まで、サハリンのユジノサハリンスク(旧豊原)を中心に行った。

戦前、日本人が海外に移住し、建設した神社の総数は568社と判明している。その地域は広く、アジアは勿論のこと、南洋やアメリカ大陸にまで及ぶ。日本人はどこに出かけるにも神社と畳を持ち運んだものをつくづく感心させられる。南樺太(現南サハリン)も其の例外ではない。さして広くはない島の中に、128社もの神社が建てられた。これは全海外神社の2割強にもあたる。樺太を最初の調査地に選んだ理由はこの高い比率に加えて、もう一つは樺太を代表する官幣大社樺太神社の存在である。規模といい、格といい、間違いなく海外神社の横綱級で、朝鮮神宮や台湾神宮と同様、その地の総鎮守として建てられた神社である。また、2万坪を超える広い境内の環境は今いかに変容しているのだろうか、実に楽しみである。

調査の時期は雪や氷に覆われない秋のうちとし、豊原(現ユジノサハリンスク)真岡(ホルムスク)泊居(トマリ)野田(チェーホフ)大泊(コルサコフ)の5地域に建てられた9つの神社と1つの表忠碑を選定する。入手した戦前の地図を頼りに、それぞれの位置を推定したり、当時の写真、絵葉書、図面等を準備する。併せてロシア側研究者への参加を呼びかけ、ユジノサハリンスク郷土誌博物館の研究者I.SAMARIN氏からの調査同行の返事を得る。

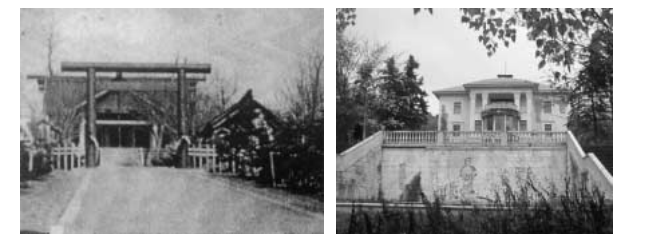
10月8日、札幌からプロペラ双発機に乗り換えて2時間、ユジノサハリンスク空港に到着する。機内で時計を2時間進め、現地時間に合わせる。ロシア側研究者SAMARIN氏の出迎えを受け、早速行程と調査対象を確認する。途中、市内本屋で現在の地図を求めが無く、(旧)共産圏どこの国も地図の入手は難しい。

翌日早朝から、実質4日間の調査を開始する。各々建築探偵よろしく、山に登り、藪を掻き分け、土を掘り起こし、神社跡地を探して東奔西走の奮闘。調査は順調に進んでいたが、食事と宿は実に厳しかった。季節柄皿盛りの

毛蟹を楽しみに行ったのに、あまかった。食卓の上は黒パンかポロポロご飯、たまたず自由市場の朝鮮食材売り場に駆け込み、キムチを仕入れる。ホルムスクでは停電はするし、お湯は出ない。ゆれるローソク火の下で凍える体を縮める。翌日やっと出たお湯は鉄錆色、仕方が無い、温かいだけましと構わず入る。ペレストロイカ以後のロシアの現状をたっぴりと味合う。

途中2日間は雨に降られながらも、予定していた10事例は順調に終了、新たに7事例を加え、合計17事例の追跡調査を遂行した。この他、日本時代の住宅や銀行等の現存状況をも併せて把握できた。短期間でこれだけの調査を可能にしたのは、なんとといってもロシア側研究者の存在と協力のお陰である、感謝、感謝。改めて海外研究におけるカウンターパートナーの重要性を再認識する。

調査内容の詳細な報告は他の機会に譲るとして、今回の調査で深く印象に残った体験を1つここに披露するなら、やはりユジノサハリンスク市街を一望にする旧旭ヶ丘の中腹に建てられた樺太神社跡地を訪ねたときであろう。鮮やかな紅葉の並木参道を奥へ奥へと進んでいくと、元来なら伊東忠太設計の神明造りの壮大な神殿が立ち現れてくるはずのところ、突然、雨霏のなかから真っ白な建物が出現してきたときには、思わずあっと声を上げた。次いで、その瀟洒な白い建物が、戦後に共産党幹部のために建てられたクラブハウスであると知って、もう一度びっくり。まさに環境に刻印された人間活動の歴史の重さを深く実感した象徴的な一コマであった。



官幣大社樺太神社

樺太神社神跡地に建てられた旧共産党幹部用クラブハウス

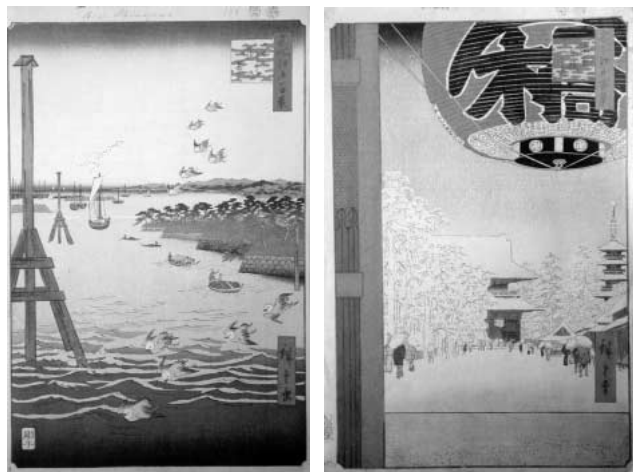
## 地震の痕跡と名所絵『名所江戸百景』の新しい読み方

原信田 實 (J-WAVEニュースエディタ)

これは、広重の『名所江戸百景』を安政という時代状況の中に置いて読み直そうという試みである。この連作は、広重が死去する安政5年9月までの2年半出版され総計118枚の点数に上った。従来、風景版画あるいは名所絵は時代とは没交渉であると読まれてきた。別の言い方をすれば、それは単なる四季に彩られた江戸の名所を描くものであると主張されてきた。

この見方は浮世絵の再発見の経緯と関係する。明治政府の勸業政策の一環として「美術」の概念が作られたが、それは西洋から輸入された概念で、浮世絵はその「美術」の範疇に入れられなかった。1911年になって欧州で写楽が再発見されると浮世絵の評価が変わった。しかし、その時には、浮世絵師など制作現場を知る生き証人は数えるほどになっていた。さらに、浮世絵が審美的な観点から再発見されたという事情から、個々の作品が審美的にいかにも優れているかという画評が、浮世絵の評価の主流になった。

今回、それを覆す1行を発見したことから従来の『名所江戸百景』の読み方を見直すことになった。それは、『武江年表』に記された「浅草寺五層塔婆の九輪、地震の時傾きたるを修理す」という1行である。これは安政3年5月の記事であるが、この五重塔を画面に描いた「浅草金龍山」という絵に押された改印(検閲印)を手がかりに、



左：最初の1枚と考える「芝うらの風景」

右：復興を祝う「浅草金龍山」

いずれも『広重名所江戸百景』(岩波書店)より引用

この写真のカラーを23頁に掲載しています。

この絵を時代状況の中に置いてみると、それから2カ月後の安政3年7月にこの絵が『名所江戸百景』の1枚として描かれていることが分かる。また紅白を基調とした図柄は、おめでたい図柄であることを示唆している。では、何がおめでたいか。それは、その1行にあるように地震から江戸の名所のひとつである五重塔が復興したためだった。

振り返って『名所江戸百景』の出版が始まったのは、安政江戸地震から約5カ月後の安政3年2月のことであった。M6.9の直下型地震は、元禄以来未曾有の大地震であり、江戸の町に大きな被害が出た。

2月に最初に出版された5枚のうちの4枚は、江戸の中心から東西南北に2里半前後、これまで名所として広重自身が取り上げることのなかった場所4カ所が選び出されている。また、最初の5枚のうちの1枚だけが、都市の中心の名所だが、その焦点の置き方がこれまでとは違っていて、將軍の別荘である浜御殿(現、浜離宮)を中心にすえている。この場所を描くきっかけとなったのは、同2月にあった將軍のお成りで、浜御殿まで行ったという記録が残っている。江戸の四宿のうちでも後発の新宿でも新名所が誕生していた。こうした都市の噂を聞きつけた板元は、地震から再生あるいは新生する江戸の名所を百景描こうという企画を立てた。そこで当時名所絵の第一人者である広重を指名した。広重にとっても、地震で一瞬にして一変した風景の再生を願って筆を執ったものと思われる。その意欲は、これまで自分自身取り上げてこなかった名所をこの連作では4割前後取り上げていることで分かる。

3月には霊廟の集まる上野の山内で修復があり、同じ月、將軍のお成りが江戸の北方にあり、6月には山王祭が挙行される。このように作品を時系列で並べていくと広重らが地震から立ち上がる都市の名所を順次取り上げていったことが浮かび上がってくる。

復興が進む中、安政3年の8月には台風に見舞われ、復興中の建物が再び被害に遭って復興が遅れる事態にもなっている。広重は、こうした二つの災害に遭遇しながら、復興への道をとつつあった江戸の真っ只中、京橋に住んでいたのである。広重がそれをどのように感じ、どのように名所絵に反映させていったのかを考えることは当然

なされてしかるべき観点ではないだろうか。これまで、こうした観点からの名所絵の解説はなされてはいない。本研究では、こうした点を踏まえ、共同研究者の協力を得な

がら、新しい名所絵の解釈を試みるつもりである。そのことは、『名所江戸百景』の再検討に留まらず、同時代の錦絵との関係性を問う大きな問題に繋がる予感がしている。

## 「図像・動作情報のデジタル入力について」

齊藤 隆弘 (神奈川大学大学院工学研究科・教授)

図像や動作などの多様かつ膨大な非文字資料のデジタルアーカイブを構築する第一の意義は、経年劣化を免れない非文字資料に含まれている情報を、経年劣化のないデジタル形式で正確に記録し、インターネットを介し誰でもが手軽に利用できるような仕組みの中で保存し、後代に継承して行くことである。しかし、その意義は、「単なる保管所のデジタル化」に留まらず、生データを画像処理技術やCG技術を駆使して分析、変換、編集、合成できる点にもある。これにより、研究者が分析、抽出した「非文字資料固有の特徴情報」を、より見やすく、評価しやすい形式で表現することが可能となる。

デジタルアーカイブを構築するには、以下の技術開発を推進する必要がある。非文字資料に含まれる情報を正確にデジタル入力する技術、様々な要因によって損傷を被った資料のデジタルデータを修復したり、あるいは資料固有の特徴情報を強調したり、抽出したりするための画像処理技術、資料のデジタルデータをより見やすい形式に変換、合成、表示するためのCG技術、インターネットを介して膨大なデジタルデータを広く世界に提供しつつ、その著作権や肖像権を保護し、かつ安全に保管、管理するための情報セキュリティ技術である。

本発表では、「非文字資料のデジタル入力」について論じた。現在、民生機器として普及しているデジタル画像入力機器は、TVや写真のデジタル化入力機器であり、これをそのまま図像や動作などの非文字資料のデジタル入力に用いても、所望の情報を必要とされる精度で取得することは困難であるか、多くの場合不可能である。そこで、絵巻物、古文書、典礼、儀式、民具、景観、所作などの撮影対象に含まれる各種の情報をデジタル入力する手段とその技術的限界、撮影・計測時の工夫の必要性、技術的限界を補填するための後処理の必要

性について論じた。以下に、特に重要な点を要約した。

- ① 絵巻物などの大面積のカラーテクスチャ情報を、細部まで判読可能なように入力するには、十分な空間解像度の複数の撮影画像を合成処理する必要がある。この際、撮影対象面とカメラとの間の距離を一定に保ちつつ、視点位置を対象面と平行に移動させ、またその視野が少なくとも半分程度は重なり合うように撮影しておく、合成画像の品質が向上する。
- ② 民具などの小型の対象物の3次元表面形状情報の取得には光切断法によるレンジファインダーが適しており、景観の3次元奥行き情報の取得にはtime-of-flight法によるレーザ・レーダが適している。しかし、これらの計測データには鏡面反射などの妨害要因によって欠落が生じたり、空間解像度が不十分であったりする。また、全周囲のデータを取得するには、視点位置と視線方向を別手段にてあらかじめ正確に把握しておき、多くの視点から計測したデータを矛盾なく統合する必要がある。
- ③ 動作や所作では、関節の動き情報が重要な情報であるが、これを撮影動画から正確に推定することは非常に困難であり、多くの場合不可能である。より現実的なアプローチは、モーションキャプチャと呼ばれる計測機器の利用である。光学式と磁気式とがあり、光学式では関節の瞬時的な3次元位置が得られるのに対し、磁気式では3次元位置とその運動方向とが同時に計測される。計測データの精度は高いものの、計測には特別な環境が必要とされる。

一般的に言って、計測データに要求される精度はその利用法によって定まる。今後、その利用形態を明確にしながら、要求された精度で所望の情報をデジタル入力する最適な手段を決定して行く必要がある。



主な研究活動

全体会議

全体会議は約40名にものぼる研究担当者が一同に会する機会である。班別に日頃調査研究活動をしている班員がそれぞれの情報を持ち寄る場でもある。会議では、プロジェクト推進の事務的な問題と報告が話し合われ、その後、全体研究会を開催して共通認識を深めている。



- 第1回 7月28日 (於: 横浜キャンパス9号館 211号室)
- 第2回 9月 1日 (於: 横浜キャンパス9号館 211号室)
- 第3回 10月 1日 (於: 横浜キャンパス16号館 第2会議室)
- 第4回 10月31日 (於: 横浜キャンパス1号館 第301会議室)

研究会

研究担当者の共通認識を深めるために、全体では月に1度(全体会議終了後) 班ごとでは随時、各々の研究を発表する。

全体

- 北原 糸子、原信田 實 (10月1日)  
地震の痕跡と名所絵 『名所江戸百景』の新しい読み方
- 齊藤 隆弘 (10月1日)  
画像・動作情報のデジタル入力について
- 川田 順造 (10月31日)  
非文字資料の諸相とその研究法 人類学の立場からの問題提起 音文化、身体技法、道具、感性等の領域



膨大な写真資料をもとに非文字について説明する。(川田)

班

- 川田順造 (9月10日・2班)  
身体技法、感性把握、道具と人間の動作について
- 窪田 涼子 (9月19日・1班)  
『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さんについて
- 西 和夫 (10月15日・1班)  
新版『日本常民生活絵引』編さん作業について
- ジョン・ポチャラリ (10月15日・1班)  
『日本常民生活絵引』の英訳の試みについて
- 河野 通明 (10月22日・2班)  
「身体技法」を手がかりとした日本列島の多民族状況の復原の模索について



写真等を用いて民具資料を分析する。(河野)

主な研究活動

現地調査

田島 佳也・札幌出張 (9月8日~9月13日)

アイヌ文化文献情報収集

廣田 律子・秋田県(田沢湖芸術村、わらび座)出張 (9月11日)

身体技法のデジタル化に関してデジタルファクトリーの事業の見学

八久保 厚志・新潟県佐渡島出張 (9月26日~9月30日)

佐渡島における海岸集落の景観変化に関する実態調査

川田 順造・フランス(パリ、南フランス、ヴォークリューズ地方他)出張 (9月30日~10月12日)

伝統的な生業道具との関係での身体技法の事例研究

河野 通明・青森県、岩手県出張 (10月9日~10月13日)

身体技法の基礎調査のため、県立郷土館ほか各地の博物館の見学

大里 浩秋、孫 安石、富井 正憲、中島 三千男・サハリン出張 (10月8日~10月13日)

南サハリンに建てられた神社跡の調査

鈴木 陽一・中国(河南省他)出張 (10月10日~10月19日)

各研究機関における画像資料の収蔵状況の調査・各研究単位の研究者と交流

宇佐見 義之、木下 宏揚、齊藤 隆弘、佐野 賢治、田上 繁、中村 政則、網野 暁・大阪出張 (10月28日)

国立民族学博物館情報管理施設視察およびデータ処理・検索、情報システムに関する意見交換

Column 国立民族学博物館を訪れて...

大阪万博記念公園内にある、国立民族学博物館(民博)を訪れ、博物館の教官・職員と情報を交換し、館内の収蔵室を含めて見学し説明を受けた。結果的に書くと、4班は情報系と文系の混成チームなので、情報系にとっては民族学全体の中での当COEプロジェクトの位置付けを知る上で大変重要なステップとなった。民博は年間37億円の予算で運営し、世界中の民族について研究を行い、また展示を行っている。一方、こちらのCOEの予算は格段に少ないことを考えると、情報系に関して言えば総合的なデジタル情報の構築を目指すよりもテーマを絞ることによって、なんらかの優位性を見い出す必要があることがわかった。(宇佐見 記)



国立民族学博物館の外観



標本画像自動処理装置



情報システムに関する意見交換



研究担当者紹介 (事業推進担当者・共同研究員)

各班リーダー(●印)以下50音順 2003年10月1日現在

Theme 画像資料の体系化と情報発信		
氏名	所属部局・職名	専門分野
●福田 アジオ	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	民俗学
菊池 勇夫	宮城学院女子大学学芸学部・教授	日本史
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科・講師	民俗学
金 貞 我	韓国延世大学博物館・客員研究員	日本美術史
小馬 徹	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	社会人類学
佐々木 睦	東京都立大学人文学部・助教授	中国文学
ジョン・ボチャリ	東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻・教授、 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・非常勤講師	比較文化論
鈴木 陽一	神奈川大学大学院外国語学研究所 中国言語文化専攻・教授	中国文化論
田島 佳也	神奈川大学日本常民文化研究所・教授	日本経済史
西 和夫	神奈川大学日本常民文化研究所・教授	日本建築史

Theme 身体技法および感性の資料化と体系化		
氏名	所属部局・職名	専門分野
●川田 順造	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	文化人類学
梅野 光興	高知県立歴史民俗資料館・主任学芸員	民俗学
落合 一泰	一橋大学大学院社会学研究科・教授	文化人類学
河野 通明	神奈川大学日本常民文化研究所・教授	農業技術史
長瀬 一男	株式会社 わらび座・チーフディレクター	民族芸能のデジタル記録
廣田 律子	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	中国民俗学
山口 建治	神奈川大学大学院外国語学研究所 中国言語文化専攻・教授	中国民間文学

Theme 環境と景観の資料化と体系化		
氏名	所属部局・職名	専門分野
●香月 洋一郎	神奈川大学日本常民文化研究所・教授	民俗学
北原 系子	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・非常勤講師	災害情報論
須山 聡	駒澤大学文学部地理学科・助教授	人文地理学・文化地理学
富井 正憲	神奈川大学工学部建築学科・助手	建築計画
中島 三千男	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	日本近代史
八久保 厚志	神奈川大学外国語学部・助教授	人文地理学
原信田 實	J-WAVEニュースエディタ	翻訳・浮世絵
三鬼 清一郎	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	日本近世史

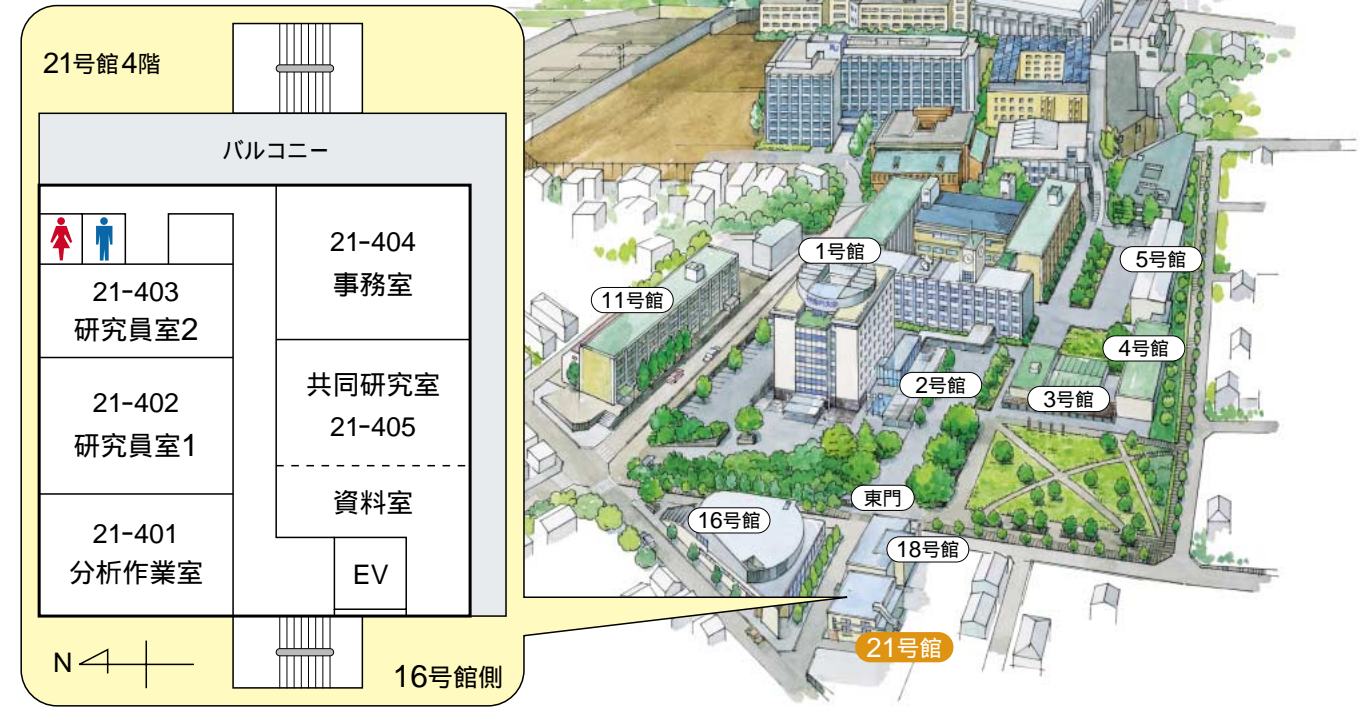
Theme 文化情報発信の新技术の開発		
氏名	所属部局・職名	専門分野
●佐野 賢治	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	民俗学
宇佐見 義之	神奈川大学工学部・専任講師	物理学
大里 浩秋	神奈川大学大学院外国語学研究所 中国言語文化専攻・教授	中国近代史
金子 隆一	東京都写真美術館・学芸課専門調査員	写真史
橋川 俊忠	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	政治学
木下 宏揚	神奈川大学大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻・教授	情報セキュリティネットワーク
齊藤 隆弘	神奈川大学大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻・教授	情報環境工学
孫 安石	神奈川大学大学院外国語学研究所 中国言語文化専攻・助教授	東アジア交流史
田上 繁	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	日本経済史
中村 政則	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授	現代史
的場 昭弘	神奈川大学大学院経済学研究所・教授	社会思想史
丸山 宏	筑波大学歴史人類学系・助教授	中国宗教史

COE研究員紹介

2003年10月1日現在  
50音順

ポスト・ドクター	
氏名	
PD 網野 暁	
富澤 達三	
藤永 豪	

リサーチ・アシスタント	
氏名	
RA 大西 万知子	
中町 泰子	

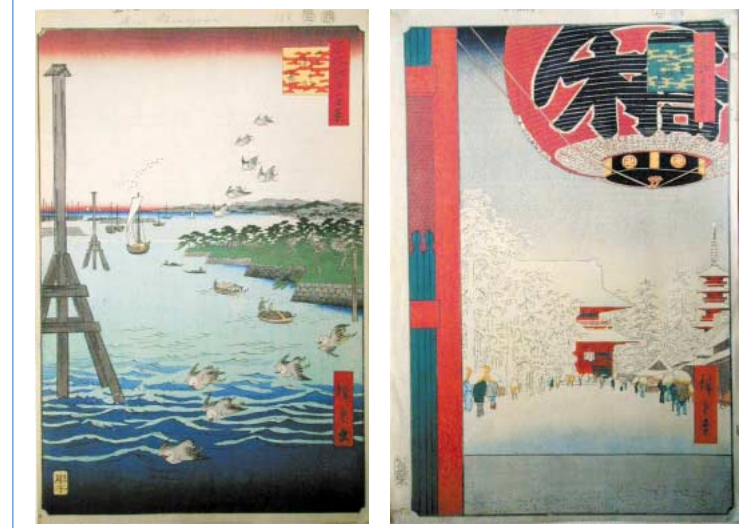


COE支援事務担当

 <p>本プログラムの円滑な運営を図るために、事務局として尽力致します。よろしくお願致します。</p> <p>庶務全般を担当します。また今後は、海外共同研究員や招聘外国人研究者など、海外との連絡も担当していきます。よろしくお願致します。</p> <p>寺島 剛真・統括</p>	 <p>図書等の資料の管理を担当します。幅広い分野の資料を分かり易く整理するのが当面の課題です。よろしくお願致します。</p> <p>広報全般を担当します。本誌やホームページなどで、研究活動の情報発信をしていきます。よろしくお願致します。</p> <p>長谷川 千穂・渉外担当</p>	 <p>図書担当</p>	 <p>広報担当</p>
--	--	--	--

写真紹介

18頁に掲載されている写真です。



最初の1枚と考える「芝うらの風景」 復興を祝う「浅草龍山」  
いずれも『広重名所江戸百景』(岩波書店)より引用

編集後記

体裁を決めたり、ロゴマークを決めたり、様々な試行を経てようやく創刊となりました。永続的な研究誌を目指してがんばります。(佐野)

9月よりニュースレターの担当になり、慌しく発行準備に追われる毎日が続きました。本誌の体裁を決めることから始めて、先生方への原稿の依頼など、何もかもが初めてづくし。すべてが手探り状態でしたが、先生方や周りのスタッフたちに助けられながら、どうにかこうにか創刊号発行にこぎつきました。次号からはもう少し余裕をもって、より充実した誌面づくりを心がけていきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願致します。(関)